

〈その他〉

ピア・ラーニングを活用したハイブリッド小児看護学領域の実習

Hybrid Program in Pediatric Nursing Practicum Utilizing Peer Learning

田久保由美子 篠木絵理

東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科

Yumiko TAKUBO, Eri SHINOKI

Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

要 旨：小児看護学領域の実習は、新型コロナウイルス感染症影響下の2021年度に初回開講し、ICTを活用した学内実習と臨地実習を組み合わせたハイブリッド実習に取り組んできた。開講3年目の2023年度からは、看護実践能力の更なる育成を目指し、学内実習プログラムを追加し、学生同士のピア・ラーニングによるアクティブ・ラーニングを強化した方略を用いた。本稿では、母性・小児看護学実習5単位のうち2単位に相当する小児看護学領域の実習について、学内実習プログラムを中心にその取り組みと課題を報告した。様々なフィールドや健康レベルにある子どもと家族を対象として、意図的に作成された教材をピアで取り組むことは、「対象となる人を全人的に捉える基本能力」、さらには臨床判断力の育成につながると示唆された。一方、学内実習プログラムは、学生の反応をとらえて次の実践に活用するといった教育力が欠かせず、担える教員の育成が課題となった。

Abstract：The first pediatric nursing practice program was launched in FY2021 under the influence of the new coronavirus infection, and has been engaged in a hybrid practice program combining on-campus practice and on-site practice using ICT. In FY2023, the third year of the program, an on-campus training program was added to further develop nursing competence, and an active learning strategy was used to enhance peer learning among students. In this paper, we report on the efforts and challenges of the on-campus training program for pediatric nursing, which is equivalent to 2 credits out of 5 credits in maternal and pediatric nursing practice. It was suggested that working with children and families in various fields and at various levels of health through peer learning of intentionally created materials leads to the development of "the basic ability to perceive the target person holistically" as well as clinical judgment skills. On the other hand, the on-campus training program requires the educational ability to capture students' reactions and apply them to the next practice, and the training of teachers who can do this has become an issue.

キーワード：小児看護学、ハイブリッド実習、ピア・ラーニング、看護実践能力

Keywords：Pediatric Nursing, Hybrid Program in Nursing Practicum, Peer Learning, Nursing Competence

I. 緒言

少子高齢社会の影響と予防接種等の効果により、入院加療を必要とする小児は減少しており、小児科を標榜する施設数は、一般病院、一般診療所共に減少が続いている¹⁾。そのため、小児看護学実習の実習施設の確保は困難であり、平成27年には母性看護学実習及び小児看護学実習においては、実習施設として、病院以外にも、診療所や保育所等を含めることが出来ること、臨地実習を充実させることを目的として、ビデオ学習等の実践活動外学習を臨地実習に含めても差し支えないことが厚生労働省より通知された²⁾。加えて、新型コロナウイルス感染症の影響により、臨地実習の内容の変更、学内実習への代替を余儀なくされ、臨地以外の場で教育代替する際、臨地も含めどのように教育をデザインするのが大学の課題として挙がっている³⁾。

本学部は2018年に開設し、4年次前期科目である母性・小児看護学実習は、新型コロナウイルス感染症影響下の2021年度に初回開講した。母性・小児看護学実習は5単位（5週間）で、4単位分は5～7月にローテーションで履修し、残り1単位分は、母性・小児領域を統合的に学ぶ内容であり4月3日間・8月2日間で履修する。

2単位（2週間）に相当する小児看護学領域の実習は、開講当初よりICTを活用した複数プログラムを組み合わせた学内実習と臨地実習を組み合わせたハイブリッド実習を展開している。開講3年目を迎えた2023年度からは、更なる看護実践能力育成を目指し、学内プログラムの追加、学生同士のピア・ラーニングによるアクティブ・ラーニングを強化した方略を用いて展開している。受け持ち児の確保が困難な小児看護学実習では、患児1名を2名の学生で受け持つペア実習によるピア・ラーニングも実施されている⁴⁾が、学内実習やハイブリッド実習における報告は見当たらない。そこで、本稿では、小児看護学領域の実習におけ

る学内実習プログラムを中心に、その取り組みと課題について報告する。

II. 小児看護学領域の実習概要

小児看護学領域の実習は、こどもとその家族を理解し、こどもの成長・発達および健康レベルに応じた小児看護の実践に必要な基礎的能力を養うことを目的としている。行動目標は以下の5つである。①こどもの成長・発達について身体的・心理的・社会的側面から説明できる。②こどもの成長発達と健康レベルに応じた援助について説明できる。③こどもの成長発達と健康レベルに応じた援助を適切に実践できる。④こどもと家族を支援するチームにおける看護の役割について説明できる。⑤看護専門職としての自覚を持ち、責任ある行動がとれる。

2週間の実習は、4日間の医療施設実習（臨地4日、臨地3日+学内1日、臨地2日+Web1日+学内1日）、2日間の保育施設実習（臨地1日、学内1日）、4日間の学内実習（オリエンテーション、シミュレーション、まとめ）で構成した。表1に医療施設の臨地実習が3日間の実習スケジュール例を示す。なお、実習先の医療施設は、NICU、小児療育施設、小児病棟、PICUであり、現状では1名の患児を受け持ち実習する場合（臨地4日間）とシャドーイングによる見学のみの場合があり、約3/4の学生が見学のみとなっている。

III. 学内実習

学内実習は、見学のための医療施設実習の場合に実施する「川崎病で入院中の幼児の観察とバイタルサイン測定」のシチュエーション・ベースド・シミュレーションと、全員に実施する「こどもの安全をまもる看護プレパレーションの計画立案と実施・評価」、「ネフローゼ症候群で入院中の幼児の観察と臨床判断」、こども

表1 小児看護学領域の実習スケジュール例

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
内 容	オリエンテーション	こどもの安全をまもる看護	こども園（臨地）	こども園事後	ネフローゼ症候群事例
	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
内 容	NICU（臨地）	川崎病事例	NICU（臨地）	フォローアップ外来（臨地）	まとめ

園事後実習の4種類で構成している。以下、それぞれの実習について述べる。

1. 川崎病で入院中の幼児の観察とバイタルサイン測定

1) 目標

①こどもの発達段階に応じたバイタルサイン測定を安全に実施できる。②川崎病と治療に関連した観察ができる。③こどもと家族とコミュニケーションをとりながらバイタルサイン測定と観察ができる。④観察した結果に基づきアセスメントができる。

2) 課題

「小児看護のためのアセスメント事例集vol.5 川崎病で入院した小児の看護の事例」(小川純子監修, 医学映像教育センター)の足立幸彦くん(1歳4か月)の受け持ち学生として、入院2日目で免疫グロブリン療法中の幸彦くんの状態をアセスメントするため、訪室してバイタルサイン測定と必要な観察を実施する。

3) 進め方

4月に実施する臨地実習の事前学習として、事例のDVDから入院当日までの映像を視聴し情報収集を行う。収集した情報に基づき、川崎病のこどもの看護を実践する上で、自己学習が必要な内容について整理し、臨地実習に向けて各自で学修する。

2023年度の実習は4名(一部8名)のグループで実施した。

最初にアイスブレイキングとして、「育児体感赤ちゃんマイベビー3[®]」(株式会社高研)を使用して、乳児のお世話体験をグループで協働して実施し、チームビルディングを狙いとする。その後、午前は、事前学修として川崎病の治療や経過等、アセスメントをする際の基礎知識となる5つの問題にグループで取り組み、ロールプレイでの説明の準備を行う。

午後は、課題問題から1つをくじで選び、さらにくじ引きで実施者1名を選出し、教員が演じる母親からの質問を受け、看護学生としてそれに応答するロールプレイを行う。次に、シミュレーションの利点として、グループで考えたことで実践し、失敗しても問題がないこと、録画をして自分では気づいていないような観点から学べることなどを学生と確認した後、課題や設定についてのプレブリーフィングを行い、短時間のグループ検討後、1回5分間のシミュレーションを2回実施する。患者状況および場面は、幼児は乳児用シミュレーター(ナーシングベビー[®], Laerdal Medical)、つきそいの母親もしくは祖母は模擬家族とし、患児は機嫌が悪く家族に抱っこされており、家族から離れると泣く設定である。バイタルサインや観察内容は、学

生が適切に実施したことが確認できたら数値や写真などの情報が提供され、観察者がホワイトボードに収集できた情報を記載していく。シミュレーション中の様子は録画し、映像を使用しながらデブリーフィングを実施する。1回目のデブリーフィングでは、正確性や安全面等について着目し、改善点を明確にして、2回目のシミュレーションを実施する。2回目のデブリーフィングでは、主にこども・家族とのコミュニケーションについて振り返りを行う。その後、シミュレーションにより得られた情報からアセスメントを行い、看護師役の教員にバイタルサイン測定時の報告を実施する。いずれの実施者についても直前にくじ引きで選出し、全員が何らかの実践を担当する。個人の記録では自己の実践部分を中心に記載し、自己省察を行う。

2. こどもの安全をまもる看護 プレパレーションの計画立案と実施・評価

1) 目標

①こどもの発達段階に応じたプレパレーションを安全に実施できる。②こどもの発達段階や個性に応じたかかわりを工夫できる。③こどもの意向や主体性・自律性を尊重したコミュニケーションがとれる。

2) 課題

事例は、急性胃腸炎で入院中の千葉元気くん(4歳1か月)、母親と2人暮らしである。症状改善し入院3日目で退院予定であったが、母親に同様の症状が出現したため、退院延期となる。体調が改善したこと、面会者がいないことから、病室内やプレイルームを走るなど危険な様子がみられている。受け持ち学生として、回復した元気くんと入院中の他のこどもたちの安全を守るため、プレパレーションを計画し、実施(実習最終日にロールプレイ発表)する。プレパレーションは元気くん1名に対するもの、他の入院児も含めた複数名に実施、いずれも可とした。なお、対象となるこどもをイメージできるように看護教育用ビデオ「子どもの安全を守る看護」(筒井真優美監修)に登場する小児1名を千葉元気くんと想定した。

3) 進め方

2023年度は1グループ4～6名で実施した。

「プレパレーション」についての理解を全員で確認後、個人ワークで模擬電子カルテから情報を収集し、入院3日目の身体面、心理面、社会面の3側面についてアセスメントを実施する。更に、3側面のアセスメントを基に元気くんにプレパレーションを実施する根拠を記述する。事例の情報収集源として教育用電子カルテ(Medi-EYE[®], Medi-LX社)を使用し、内蔵データの一部を変更し、本事例に即した情報を掲載した。

これらの個人ワークに取り組む時間は70分程度とし、アセスメントに必要な情報を意図的に収集することを課した。その後、アセスメント内容とプレパレーションを実施する根拠についてグループで共有し、援助計画の立案、必要時プレパレーションツールの作成、ロールプレイ発表練習にグループで取り組む。

実習最終日のロールプレイ発表は、1グループ5分以内で実施し、こども役は事前打ち合わせなしで他のグループ学生が担当する。また、発表に対して以下の6項目について相互評価を実施する。①こどもと話すときは、こどもの目線に立っていた。②こどもの理解力にあわせた内容であった。③こどもの集中力にあわせた方法であった。④事実に基づき、正直に話していた。⑤こどもの反応を読み取りながら実施していた。⑥話をしたこどもの様子を観察できていた（とてもあてはまる～あてはまらない、の5件法）。ピア評価の結果は、全グループの発表後直ちに公開し、教員からのコメントと共にフィードバックする。

3. ネフローゼ症候群で入院中の幼児の観察と臨床判断

1) 目標

①ベッドサイドの観察により身体・心理・社会面の情報収集ができる。②得られた情報から児の状況を推論できる。③情報を統合して解釈し、看護問題の根拠が説明できる。

2) 課題

事例は、ネフローゼ症候群で入院3日目の船橋すみれちゃん（5歳）、単身入院中である。実習初日、カルテからの情報収集をする前に、教員と一緒に訪室して挨拶し、3分間ベッドサイドでの観察をして情報収集を行う。その後、カルテからの情報と観察から得られた情報を統合し、挙がっている看護問題の根拠となる関連図を作成する。

3) 進め方

2023年度より追加したプログラムであり、6～10名をくじ引きで決めた2名でのペアワークで実施した。

ペア毎にホワイトボードを1台準備し、各ワークはホワイトボードに記載し、全体で共有することを繰り返す。最初にアイスブレイキングとして、ネフローゼ症候群について知っていることを3分間で挙げ、お互いの知識の程度を確認する。次に5歳児の発達をふまえてすみれちゃんへの挨拶を考えた後、ペアが分かれて模擬病室を訪れ、挨拶後に3分間無言で情報収集を実施する。すみれちゃんはセミファーラー位で臥床しており、ベッドサイドには飲水表や好みのおもちゃな

どが置かれており、手には点滴以外にもおもちゃの指輪や時計をつけている（写真1）。ベッドサイドの観察で得られた情報から考えられることを書きだし、身体・心理・社会の3側面で分類し、共有する。その後、家族構成、入院時の医師カルテ内容、薬剤等の指示、看護問題について記載された情報用紙を配布し、看護問題「#1 免疫機能低下と認知発達の特徴から感染を起こす危険性がある」が抽出された根拠について、観察した内容も含めた関連図をペアで作成する。関連図の作成は約90分で取り組み、全体で共有と意見交換を実施する。関連図の完成度に合わせ、教員からのコメント、関連性の整理を行う。その後、ブラッシュアップした関連図を写真に撮って記録に残し、自己の考察と学びを記述する。



写真1 「ネフローゼ症候群で入院中の幼児の観察と臨床判断」船橋すみれちゃんの病室

4. こども園事後実習

1) 目標

①こどもとの自己のかかわりについて成長発達の視点から評価ができる。②学びを共有し、集団で生活するこどもの健康レベルに応じた援助について考察できる。

2) 課題

こどもと自己のかかわりの1場面を取り上げ、発達の3側面（身体・運動、心理・認知言語、社会性）について考察する。

次のテーマ「こどもの成長・発達に応じたかかわりの実際と、集団で生活するこどもの健康レベルに応じ

た援助の必要性について」でカンファレンスを行い、学びを共有する。

3) 進め方

こども園実習で直接こどもと関わった1場面を想起し、学生の言動やこどもの反応など体験したことを記述し、そこから身体・運動、心理・認知言語、社会性の発達の3側面および自己のかかわりについて考えたことをワークシートに記述する。記述後、同年齢のクラスに配置された学生間でワークシートを交換し、以下の内容についてピア評価を実施する。①「体験したこと」には、こどもの様子が具体的に書かれている。②「体験したこと」には、学生のこどもへのかかわりが具体的に書かれている。③記載されている内容は事実(外から観察できること)のみが書かれている。④「体験から考えたこと」には、こどもの身体・運動の側面について書かれている。⑤「体験から考えたこと」には、こどもの心理・認知言語の側面について書かれている。⑥「体験から考えたこと」には、こども社会性の側面について書かれている。⑦「体験から考えたこと」には、自己のかかわりについて書かれている。⑧「体験から考えたこと」は、学んだ知識を使って書かれている。さらに、ワークシートの記述内容がより良くなるためのアドバイスについて書き、ペアの学生に渡し、各自でブラッシュアップをする。その後、自己のかかわりについて、こどもの成長・発達および健康レベルに応じた援助の視点で評価して記述する。

個人ワークの後、配置されたクラスを混合した4～6人のグループで、「こどもの成長・発達に応じたかわりの実際と、集団で生活するこどもの健康レベルに応じた援助の必要性について」カンファレンスを実施し、グループ間で共有と意見交換を実施する。

IV. 取り組みの成果および考察

1. 小児看護の対象理解

4種類の学内実習は、1歳から6歳までの幼児期を対象としている。使用するシミュレーターや人形等による制約もあり、小児看護が対象とする発達段階としては限定されるが、幼児期は1年でも身体面・認知言語・社会性の発達は著しい。既習の知識に加え、こども園実習での経験、学内での複数事例の取り組みにより、こどもの成長発達の理解を深められていると考える。また、看護の対象としてのこどもの理解には、成長発達と健康レベル双方の視点を統合することが必要であり、年齢だけでなく、身体的状況の異なる事例を複数経験することの意義は大きいと考える。特に、「こどもの安全をまもる看護」のプレパレーションの計画

立案は、成長発達という現象をよりリアルにとらえられるよう、保育施設での臨地実習の翌日もしくは前日に配置し、発表は最終日としている。そのため、同じ4歳児の安全を守る支援でも、集団の場で実践されている教育的な関わりに基づく支援と、疾患からの回復過程にあり、面会者のいない状況下にあるという、こどもの個別的状況に基づく支援では、その根拠や方法が異なり、個別性ある支援を考える機会となっている。更に、医療施設実習は、NICUや小児療育施設等、小児系一般病棟に比して長期的視点に立つ「トータルケア」が求められるフィールドで行っており、常に成長発達する存在としてこどもの理解を深める経験となっている。これらにより、本実習の行動目標である「こどもの成長・発達について身体的・心理的・社会的側面から説明できる」「こどもの成長発達と健康レベルに応じた援助について説明できる」の達成に至ったと評価する。また、これらの経験は、小児看護の対象理解のみに留まらず、看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーの1つである「対象となる人を全人的に捉える基本能力」⁵⁾の育成にもつながるものと考えられる。

2. ピア・ラーニングによる効果

本学内実習では、個人ワークとグループワークを組み合わせて実施し、相互学修の機会を多く取り入れている。なかでも、ピア評価や個人ワークに基づくペアワークでは、学生1人1人の主体的な参加が求められ、自己と他者を客観的に認識する機会となっている。これは構成的かつ意図的な学修計画に基づく学内実習ゆえの強みである。臨地での受け持ち実習では、受持ち期間の短期化、個人情報保護の観点から、患者情報の共有や他の学生の記録の閲覧などに限界があり、学生相互にどのように取り組んでいるか、具体的に知することは難しい。アセスメントのように、状況に応じる要素があるものの、確固たる正解がないものに対し、自信のなさを発言する学生は多い。しかし、模擬事例を活用し、全員が同じ条件で情報が提供される学内実習であるからこそ、他の学生がどのように取り組んでいるのか、自己との相違に気づくことが可能となる。また、「ネフローゼ症候群で入院中の幼児の観察」は、初回挨拶時の僅か3分の観察であるが、着目した情報の違いがその後のアセスメントに直結していく経験をさせる。個人ワークからペアワーク、そして全体共有のプロセスを繰り返すことで、看護者として意図的な観察と知識を活用することの必要性に気づき、2週目に医療施設実習を行う学生は、学内実習での経験を直ちに応用している。三浦らは、タナーの臨床判断モデルを主軸とした教育方法について記述しており、臨床判断

能力を育むための教育方法として、事例を使い、「気づく」を支援すること、ディスカッションを重視する教育を行うことと述べている⁶⁾。本学内実習は、どれもこれらの点を重要視しており、看護実践能力の育成につながっていると考ええる。

3. 本実習における課題

本文で紹介した学内実習はどれも1日のプログラムであり、プログラム個々の目標達成はこれらに到達できるように授業設計していることから難しくはない。しかし、個々の体験をつないでいくのは学生自身の力によるものが大きい。最終カンファレンスでは、「子どもと家族を支援する様々な場における援助実践の評価結果と評価により、看護の役割と捉えたこと、役割を果たすために、支援の実践者として自分に必要な力は何か」について取り組んでいるが、このテーマを内在化できる学生は多くはない。また、患者や家族、臨床指導者等が存在する臨地実習とは異なり、学内実習はプログラム作成から運営に至るまで、担当する教員の教育力が必要とされる。シミュレーションのファシリテータ役割含め、このような学内実習を担える教員の育成も課題である。

V. まとめ

小児の実習施設確保の困難さとCOVID-19の影響により発展させてきた学内実習であるが、学内実習であるゆえの強みが明らかとなった。また、小児を取り巻く状況が変化する中、従来の臨地実習を主とした小児看護実習は現状と合致しておらず、様々なフィールドや健康レベル、意図的に作成された教材に取り組む中

で看護実践能力を育成していくことが重要と考える。それには、臨地実習ならではの強みと学内実習の強みを十分に意識していくことが必要である。

文献

- 1) 厚生労働省. 令和3 (2021) 年 医療施設(動態)調査・病院報告の概況. 2022 ; 12. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/21/dl/11gaikyou03.pdf> (2023.7.26 Accessed)
- 2) 厚生労働省医政局看護課長. 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について. 医政看発0910第4号. 2015. https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2023.7.26 Accessed)
- 3) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書. 2021 ; 1-6. https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/covid_19/faculty/pdf/report_uniforcovid19.pdf (2023.7.26 Accessed)
- 4) 佐藤朝美, 小村三千代, 堀田昇吾. ピア・ラーニングを活用した“ペア受け持ち制”小児看護学実習における学生の体験. 日本小児看護学会誌2018 ; 27 : 73-82.
- 5) 日本看護系大学協会. 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. 2018. <https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf> (2023.7.26 Accessed)
- 6) 三浦友理子, 奥裕美. 臨床判断ティーチングメソッド. 第1版. 東京 : 医学書院 2020 ; 37-56.